

市民提案募集に際する基礎資料

中期的課題	現状と課題	検討の背景等	他園館(20園館)の調査結果及び外部アドバイザーの意見(10月23日集約現在)
<p>①組織強化のあり方</p>	<p>【現状】 ・獣医師の業務内容が非常に多岐に渡っており、診療業務や施設の安全管理を担う体制が十分整っていないとはいえない現状にあります。</p> <p>【課題】 ・上記の現状に鑑みて、日々の動物診療に加え、動物舎の安全点検や動物の健康管理全般に係る業務を円滑に遂行していくことが必要です。</p>	<p>・短期的な取組として、まずは、ミーティングなどの充実を通し、情報共有の強化を図りました。</p> <p>・一方で、中期的な取組として、他の動物園において多く導入されている、獣医療に関する専門の組織(例えば「動物病院係」)の設置について、検討していくことにしました。</p>	<p>【他園館の調査結果】 ・獣医療の専属組織：15園館に設置 ・組織名称：「動物病院」、「動物病院係」、「動物診療係」、「診療係」、「衛生係」等</p> <p>【外部アドバイザーの意見】 ・獣医師が頻繁に変わると、治療技術の向上のみならず飼育係からの信頼が失われかねない。 ・飼育係から独立して、獣医療の計画策定や質向上を行うことも重要。 ・飼育技術を習得し、飼育員と一体となった治療が必要。 ・係長職の獣医師は、動物病院と全体の安全管理を担当し、動物に関する情報集約を常日頃から行うことが重要。 ・獣医師は、他の係よりも高い頻度でミーティングを行い、情報の共有を図ることが大事。 ・職員全体のコミュニケーションの向上ためには、ワンフロア化するなど、レイアウトの工夫も大切。</p>
<p>②人材確保・育成のあり方</p>	<p>【現状】 ○飼育員の採用・配属 受験資格：高校卒業以下 職種：札幌市には「動物飼育員」という専門的な職種は存在しておらず、業務職員として採用されています。 配属：清掃事務所、学校給食等の配置場所の一つとして動物園に配属されています。</p> <p>【課題】 ・動物園では、飼育技術の継承が極めて重要となります。 ・最近では、動物園の飼育員を希望する者は、専門学校等に進学し、専門的な知識や技術を学ぶ傾向が強まっています。 ・上記に鑑みて、動物飼育の専門知識や技術を有する人材の確保・育成が必要です。</p>	<p>・全国には、動物飼育の専門知識・技術を有する人材確保のため、専門職制度を導入している動物園もあります。 こうした例も参考に、今後、外部アドバイザーからの助言を受けながら、組織強化のあり方を検討していくことにしました。</p>	<p>【他園館の調査結果】 ・管理運営体制 直営：12園館、指定管理者：8園館、独立行政法人：0園館 ・飼育員の募集に関する要件 大学卒業以上：3園館 短大卒業以下：1園館 専門学校以上：7園館 高校卒業以上：2園館 高校卒業以下：3園館 学歴等不問：4園館 ・飼育職員の職 技術職員：13園館(うち5園館は技能職員と混在) 技能職員：4園館 業務職員：2園館(うち2園館は一部技術職員) 事務職員：1園館 ・飼育員の動物園外への異動の有無 あり：9園館 なし：11園館</p> <p>【外部アドバイザーの意見】 ・動物園では、人材育成と飼育技術の継承が極めて重要であるが、指定管理者制度は、これらの事柄を担い続けることは難しい。 ・独立行政法人化の検討も行ったが、動物の将来にとって十分なメリットが見込まれず、同時に検討していた他の園館とともに現状では導入を見送っている。 ・専門飼育員制度を導入し、大学等で動物の専門知識を学んだ人又は動物関連施設での実務経験のある人を動物飼育員として採用した結果、組織内の活性化が図られた。また、新施設計画の際のワーキンググループでも中心的な役割を果たした。 ・新制度導入の際には、既存職員の処遇への考慮(専門職への転換を可能にする等)も重要。 ・動物園の職員数の過不足の把握は難しい。たとえば、ネズミとゾウでは必要な職員数はまったく違う。このため、頭数や規模を物差しにして職員数が多い(少ない)と単純に論じることはできない。 ・動物種によっては、コミュニケーションや信頼関係を築くために1年以上を要するものもある。 ・動物園のすべての動物治療技術をマスターするには、3年以上の期間を要する。 ・3年を超えても動物園勤務が継続できるようにしないと、技術水準の維持は難しい。 ・内部の教育システムが重要。欧米では内部で教育を受けて、選ばれた人が次のステップに上がれる。 ・獣医師を含め、管理職の人事異動が激しいと人材が育たない。 ・獣医師には、10年ぐらいいは、動物園にいてほしい。一通りのことを学ぶには、それほどの時間を要する。 ・動物園の役割が、以前とは変わってきている。それに相応しい人材を確保するには、専門職制度も必要。</p>
<p>③開園時間又は休園日のあり方</p>	<p>【現状】 ○開園時間 夏期：9時～17時(8時間) 冬期：9時～16時(7時間) ○休園日 12/29～12/31(年間3日) ○職員勤務時間(時季を問わず共通) 8時45分～17時15分(休憩：12時15分～13時00分)</p> <p>【課題】 ・上記の現状に鑑みて、動物の体調確認、各動物舎の安全点検及び職員の情報共有をより綿密に行うための時間を十分に確保する必要があります。</p>	<p>・円山動物園の営業時間は1日8時間ですが、他の主要な公営動物園は、平均7.5時間程度となっています。 ・また、休園日については、円山動物園は年間3日間のみですが、多くは毎週設けたり、まとめて時季で設けている動物園もあります。 ・万全の態勢で動物園運営を行うためには、動物の体調確認や各動物舎の安全点検、職員の情報共有をより綿密に行うための時間を十分に確保する必要がありますが、このため、他園の状況を参考に外部アドバイザーからの助言を受けながら検討していくことにしました。 ・なお、この課題については、市民サービスの低下につながる懸念もあるため、慎重な検討が必要と考えています。</p>	<p>【他園館の調査結果】 ○開園時間(平均) 夏期：7時間42分 冬期：7時間21分 ○休園日数(平均) 年間：46.0日 週次設定：18園館(月曜日を基本とする園館が多数)</p> <p>【外部アドバイザーの意見】 ・毎週設けることで、大きく以下のメリットがある。 -動物たちのストレス軽減 -集中的な施設改修等、園内整備の実施、安全点検 -職員全体による会議、研修実施 -職員による繁殖に向けた準備作業 ・実際に休園日には、動物たちがリラックスしているように見受けられる場合もある。 ・今後、希少動物の導入が難しくなることから、繁殖推進は、極めて重要になってくる。 ・現在飼育している動物をより長生きさせることもこれまで以上に大事な考え方になってくる。 ・動物園の使命は、動物をきちんと見せられる状態で開園すること。そのためには、休園日も必要。</p>